

論文審査の結果の要旨

報告番号	甲 第 3217 号	氏名	関谷 文武
論文審査担当者	主査 渡井 有 教授 副査 水野 克己 教授 副査 長塚 正晃 教授		
<p>論文題名；</p> <p>骨盤 X 線撮影による 0-angle 計測は分娩予後予測に有用で、経会陰超音波検査における児頭下降度 station±0 の可視化に応用できる</p> <p>掲載雑誌名；</p> <p>昭和学会雑誌 2021 年 掲載予定</p> <p>(論文審査の要旨)</p> <p>分娩に際して児頭の下降度の正確な評価は分娩の安全性を担保するために重要である。本研究では、経会陰超音波検査で station±0 の位置を可視化する方法の開発を目的に検討を行った。妊娠 35～39 週の単胎頭位妊婦の骨盤 X 線検査の 501 画像を用いて、左右の坐骨と恥骨下縁を結ぶ平面を station±0 として、この平面と恥骨長軸とが成す角度を 0-angle として計測した。その結果、0-angle の平均±標準偏差は $118.9 \pm 5.9^\circ$ で正規分布を示し、0-angle 計測は高い再現性を示した。母体体重、身長など全ての母体背景因子と 0-angle に相関性は認めず、一般的に利用できる指標と考えられた。一方、経膈分娩を目指して経膈分娩となった群と比較して分娩停止で帝王切開となった群の 0-angle は有意に小さいことから、骨盤入口面・瀾部の浅い骨盤は児頭下降不良になりやすいことが示唆された。このことから、経会陰超音波検査を用いて 0-angle の基準値をもとに児頭の下降度を客観的に評価出来ることが示された。このように本研究は station±0 を可視化する学術的に価値の高い研究であり、本論文は本学大学院学位論文（博士）審査基準を満たしており、学位論文に値すると判断した。</p>			

(主査が記載、500 字以内)